

若手・産業界・地域・国際連携が盛り上げる
表面科学を！



会長 尾 嶋 正 治

あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願いたします。

2015年はブラッグ父子が「X線による結晶構造解析に関する研究」でノーベル賞を受賞してから100年が経過した centennial です。表面研究において原子の構造は表面の機能と密接に関係しているため、電子線回折、電子顕微鏡とともにX線構造解析が果たした役割は非常に大きいものがあります。

表面科学会では現在、この夏発刊をめざしてブルーバックス「すごいぞ！身の回りの表面科学」を編集途中で、その中には表面科学と密接に関係したノーベル賞15件のコラム記事も含めています。昨年10月、赤崎氏、天野氏、中村氏が青色LEDでノーベル物理学賞を獲得したニュースは日本人を大いに勇気づけましたが、結晶成長はまさに表面科学です。そこで、急遽そのコラム記事もブルーバックスに盛り込みました。

表面科学を中心とした学会は世界ではきわめて珍しく、独自性ある日本の学会です。また、日本表面科学会は産学のバランス、若手・中堅・年配のバランスが良いすばらしい学会だと思っています。これをさらに発展させるためには、以下の三つが重要であると考えています。

1. 「若手と産業界、そして支部・地域」を重視

1991年に関西支部、1992年に中部支部、1993年に東北・北海道支部を発足して進めてきた地域活性化活動をさらに発展させるため、2015年度から関東支部を発足させます。昨年10月に産業界28社が参加した会長懇談会を開きましたが、この勢いで1月の支部設立総会において関東支部発足を広くアナウンスいたします。また、近い将来の5支部体制をめざして九州支部準備会も開設しており、支部活動の活性化、会員増強と若手育成、産業界との連携を積極的に推進したいと考えています。

2. 学術講演会、市民講座などをわかりやすく面白く

産業界のニーズにきめ細かく対応するため、実用表面分析セミナーなどの企画を行っていきます。また、わかりやすく面白く市民講座を支部主催で開き、公益社団法人としての責任を果たしていきます。

3. 国際化と他学会との連携推進

昨年11月にISSS-7を松江で開催し、700名以上の参加者を集めて大盛況のうちに幕を閉じました。また、昨年8月に第3回の韓国真空学会との合同国際シンポジウム（台湾真空学会、米国AVSも共催）@韓国が開かれ、表面科学会は日本真空学会とともに共催いたしました。今年12月につくば国際会議場で開催する表面科学会・真空学会合同学術講演会において、中

国真空学会も含めた5か国6学会の合同国際シンポジウムを開催しようと考えています。また、昨年末には PacSurf 2014 がハワイで開催され、環太平洋の10か国の学会が共催して交流を深めました。

こういう交流を通じて表面科学をさらに発展させたいと考えておりますので、引き続きご協力をよろしくお願いいたします。
(東京大学・名誉教授)